HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	張載關學思想探微 : 宋明理學における「虚」の思想の研究 [全文の要約]
Author(s)	山際, 明利
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7171号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87748
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Akitoshi_Yamagiwa_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　山　際　明　利

学位論文題名
張載關學思想探微――宋明理學における「虚」の思想の研究――

本稿は北宋の儒者、張載の人物と思想とに關する、史上初の、日本語による專著である。

張載、字は子厚。眞宗の天禧四年（一〇二〇）に生れ、神宗の熙寧十年（一〇七七）に沒した。居所にちなんで横渠先生と稱せられ、長く關中（陝西省）で講學したためその學を關學と稱する。日本人にとつては終戰の詔勅に使はれた「萬世の爲に太平を開く」といふ言葉（『張子語錄』卷中）によつて親しい。

張載は周敦頤、程顥、程頤と竝ぶ北宋四子、またこれに邵雍を加へた北宋五子の一人として朱熹の尊崇を受け、その學は朱子學の先蹤と評價される。しかしまた朱熹は周敦頤および二程を道統の本流と見做し、張載および邵雍は傍流とした。朱熹は張載の氣論、心性論などは高く評價するが、本體論、修養論などには批判的である。張載の學に對する朱熹の態度は批判的攝取と評するのがふさはしい。

張載の學に關しては「朱子學に吸收されてしまった」といふ見解がある。たしかに、張載の關學は、二程の洛學とともに、朱子學を構成する要素として取り入れられ、その意味で朱子學に吸收されてしまつたのだと言ふのは不當ではない。しかしこの評價を文字通り張載の關學に適用すると、朱熹が批判したものが朱子學に吸收されるといふ事象が生じたことになる。この自家撞著めいた事象についてどう考へたら良いのであらうか。

二十世紀後半の一時期、中華人民共和國の思想史學界において宋明の儒學思想を唯物主義、唯心主義に分類し、氣を重視するのが唯物主義であると規定した上で、唯物主義思想が最も進步的であり歷史の發展に貢獻したものだと論ずる動きがあつた。二十一世紀の現在、張載が唯物主義哲學者であるか否かといつた觀點には殆ど意味は無くなつたと考へて差支へなからうが、唯物史觀といふことを離れた地點から考へたとき、張載の學は氣の學と呼び得るものであるのかどうかといふ問題は、引き續き檢討する價値のある問題である。

他方、明代中葉以降、すなはち朱子學が官學化し、王學が盛行する中で、張載の學を批判する儒者、反對に張載の後繼を自任する儒者が、それぞれ出現する。朱子學に吸收されてしまつた學が、數百年を經てなほそれ自體として論評の對象となるのは何故であらうか。張載の學には、單に「朱子學の先驅」とだけ解して濟ませることのできない、獨自の思想的立場があるのではないか。

本稿の目的は、張載思想の特色、獨自性を明かにし、その歷史的意義を再定義することにある。それによつて宋明時代儒學思想史が全面的に刷新されるなどといふことはあるまいが、思想史について考察する際の前提に幾許かの新しい要素を提供したいと思ふ。

本稿では如上の問題意識を前提として、思想家としての張載の全體像を論述すべく、全文を三部に分け、それぞれを「人物像」「思想內容」「影響」の解明に宛てた。

第一部では張載の人物像を明かにすべく、生涯と業績とに關する考察を行なつた。特に官僚としての事績については詳細に亙る分析を行なつた。張載が政府權力中央に接近する機會を得ながら短期間で離職した經緯について考察することで、張載の思想が權力中樞の求めるところではないほどの、純眞な思想であるといふことを明かにし、これ以降の本稿における張載思想探索の立脚點を得

た。

第二部では張載の思想内容を考察した。前半第一章では思想全體に關する概括的な考察を行なひ、後半第二章では特定のトピックを定めてそれに關する張載の見解を探るといふ作業を繰返した。

第一章第一節では張載思想の核心とも言ふべき太虛卽氣論に關する檢討を行なつた。張載は存在の生滅を氣と虛との循環で捉へる。さらに存在の本質を虛と見做し、存在が虛と有形の物と兩樣のあり方を循環的にとると考へる。かくて張載の氣論が循環思想の特色を有すること、張載が存在の樣態を虛と有形との渾一において捉へたといふことを明かにした。

第一章第二節では「天地」「氣質」の性説に關する檢討を行なつた。張載の性説は性に二重性を見るのではなく、一つの性に兩面の性格がある、といふ捉へ方をすべきものであること、そのことは太虛卽氣論に見られるのと同じ、ことの兩面を渾一的に把握する、張載の思惟の特色が現れたものであるといふ知見を得た。あはせて張載の提起した「天地」「氣質」といふ性概念が、一部に言はれるやうな道家思想の影響ばかりでなく、『禮記』に對する解釋から發生した可能性があるといふことを指摘した。

第二章第一節では『論語』の「縱心」「絶四」といつた章に對する張載の解釋を手がかりとして、聖人に關する觀念、死生に關する觀念を檢討した。太虛卽氣論を前提に置きつつ張載の論語説を解析することで、張載の聖人觀は虛の聖人觀であること、死を虛への回歸と捉へたことが判明した。

第二章第二節では同じく『論語』の「屢空」に對する歷代の解釋に著目し、「空空如」に對する張載の見解を援用することで、張載の心性説が虛を重視するものであることを確認した上で、それが呂大臨の「空」の説へと繼承されたことを明かにした。同時に、朱熹が張載の學を繼承するに當つて、道家的な要素を排除したこと、しかも排除された要素にこそ張載の學の特色があることを知つた。

第二章第三節では「大學」の「格物」に關する解釋を縱覽する作業を通じて、張載に獨特の格物説があること、その格物説は、宋學の主流とはならなかつたものの後代にも繼承され、王守仁の格物説にも影響を與へた可能性があることを發見した。

第二章第四節では禮思想に關する檢討を行なつた。理念において禮は天に由來するものであり、人が禮を實踐することはすなはち天人合一の實現である。他方、實踐にあたつて張載が制作した禮は宋代の實情に適合せず、また張載が實驗した井田は宋代の社會で實現するものではなかつた。禮思想に關する檢討を經て、張載の思想が理念においては高邁で人を感奮させるが、實踐性、特に統治思想としての實效性といふ點では疑問を持たれざるを得ないといふ性質を有するものであることを明かにした。

第三部では張載及び門弟の學すなはち關學が宋明理學思想に與へた影響について考察した。

第三部第一章では宋代道學における「氣」の意味合ひについて檢討した。氣は張載によつて思想的な意味を與へられた。張載にあつては氣は外形と内面との兩方で重要な意味を有するものであり、その氣論は朱熹にも受け繼がれた。他方、朱熹以外の道學諸儒においては内面の氣が重視され、外形の氣が殊更に論議の對象とはならない傾向がある。すなはち氣の外形重視といふ點で張載から朱熹への繼承關係が存在することが明かになつた。

第三部第二章では『孟子』に見られる「赤子之心」への解釋の變遷を通じて、宋明理學思想に占める關學の位置について考察した。關學では「赤子之心」つまり生まれ持つた純眞な心を心の本來態と捉へ、虛心になつて禮を實踐することで「赤子之心」に復歸することを修養の意義と考へる。他方、洛學では心の本來態を理念上の未發に求め、靜坐、居敬窮理を方法として未發を涵養することを重視する。洛學の修養論が朱子學に繼承され、關學の方法論は思想史の主流とはならなかつたが、反面、關學、特に呂大臨の、心の本來態を赤子といふ實體に見る見解は朱熹に強く影響し、朱子學成立の契機の一つとなつた。さらに思考樣式として、「赤子之心」を本來態とする考へ方は長く明末淸初にまで繼承された。この檢討を通じて、宋明理學の流れに關學が裏面から强い影響を保持したことを明かにした。

第三部第三章では大鹽平八郎の太虛説を手がかりとして、張載の思想が王學に及ぼした影響に關

する考察を行なつた。王守仁が太虛の語を使用するときは譬喩としての意味合ひが強い。反面、良知説の内容を檢討してみると、太虛といふ語彙は用ひないものの、思考の展開は張載の太虛説からの影響を思はせる。張載の學は語彙ではなく思考内容において王學に影響した可能性があるといふ知見を得た。

第三部第四章では「西銘」末尾の「存順沒寧」に對する朱熹の解釋の變化を考察の對象とした。學説定立期の朱熹は「存順沒寧」を理念的に把握したが、後年、學者の實體に卽した方向へ解釋を變更した。かうした理念から實體への下降といふ動きは明儒における理氣一元化の契機となつたもので、朱子學自體の中に明代への展開が豫告されてゐたことになる。その胚胎となつたのは關學とりわけ呂大臨の思想であり、宋明理學思想史の中で、關學の影響が目立たぬながらも永く繼續したことを明かにした。

以上の檢討を經て、結論部において、冒頭部に掲げた問題に對する筆者の見解を述べた。

まづ「張載の學は氣の思想と呼び得るものであるかどうか」といふことについて。上に述べたやうな本稿での檢討を經て言ふならば、張載の思想は氣の思想と呼ぶよりはむしろ虛の思想と呼ぶのが適切な思想である。存在といふこと、生滅といふことを論ずるとき、張載は一氣の聚散を述べるが、同時に虛への回歸といふことが強く意識される。心性といふことを論ずるとき、張載は氣質の性といふ概念を提示したが、同時に人の本來性を天地の性と表現する。天地とはその性質において太虛の顯現であるから、人の本來性は結局、虛に求められることになる。張載の思惟の基調は太虛と有形の物と、また天地と氣質と、の間の循環論であり、天人合一を說くことは結局、虛との一體化といふことを意味する。

次いで「朱熹の批判した思想が朱子學に吸收されたといふ自家撞著」について。張載の氣論は「物と太虛との循環過程における氣の聚散」であつたが、朱熹は太虛を切り捨て、「一氣の聚散による萬物の生滅」といふ形でこれを吸收した。張載の心性説は虛への回歸といふ觀念を背景とするが、朱熹はそこを切り捨て、天地氣質の性説を吸收した。朱子學に吸收されたのは張載が提示した、世界を解釋する思考方法の構造であり、その思考を裏打ちする部分、言はば思想の真面目となる虛への志向は排除された。換言すれば、張載の虛氣渾一的思考が提起した世界把握の概念を、朱熹は理氣一貫の樣式に再編して吸收した。單純な圖式化になることを承知の上で敢て言へば、朱子學の存在論において出發點となるのは周敦頤の太極であり、歸著點となるのは二程の唱へた天理の一貫する世界像である。この出發點と歸著點とを結ぶ思考の經路、實質的な思考の本體は、張載の一氣聚散説、また張載が「西銘」で暗示した理一分殊説である。また朱子學の心性論において出發點となるのは周敦頤の無極太極の思考であり、歸著點となるのは程頤の性卽理の思考である。この出發點と歸著點とを結ぶ思考の經路、實質的な思考の本體は、張載の天地氣質の性説、ならびに心統性情説である。朱熹は周程の用意した思考基盤に基づいて學を建てたかのやうに見えるが、思考の實質的内容は張載によつて用意されたものである。張載の學と朱子學との關係は、思考樣式、思考の内容において影響し、思考基盤において排除されるといふ關係である。自家撞著ではなく、どの部分に著目するかといふ問題なのであつた。

そして「朱子學の先驅といふにとどまらぬ思想的立場」といふこと。張載思想の核心となる虛の思想は程朱學から排除された。その排除された部分に影響された思想家が南宋以降、淸代に至るまで連綿と出現する。王學の太虛説は必ずしも張載の太虛説と類似しない。しかし太虛といふ語彙を度外視して考へたとき、良知といふ概念を説明する王守仁の論理に、張載の虛氣相卽の渾一思想との類似が認められる。また呂大臨は張載の學を繼承しつつ程頤の影響を受けて關學を進展させた。朱子學の定立に呂大臨の思考が與へた影響は小さなものではない。宋明理學の主流は程朱學から王學への流れであること、論を俟たないが、張載の學、そして關學の影響は、思想史の背景にあつて、目立たぬながらも長く命脈を保つたのだといふこともまた強調されなくてはならぬ。

學者の修養としての「虛心になつて禮を實踐する」といふ手法は、程朱學の居敬窮理といふ簡明な工夫のごとくには普及しなかつた。統治思想としての「三代に復つて封建、井田を行なふ」といふ主張は、宋代以降の社會に適合するものではなかつた。實踐哲學としては受容されなかつたとい

ふ評價になる。

思考の構造は朱子學に吸収されてしまつた。これを反面から言ふならば、張載の提示した思考の構造は、朱子學の基本構造となつて宋明理學の思考を支へることとなつた。

そして張載の掲げた理念は永きに亙つて人を感奮させ、また核心としての虚氣相卽の渾一思想は長期的な影響力を持つた。

本稿では以上の檢討を經て、宋明理學に對する張載および關學の影響が、從來考へられてきた以上に重大なものであることを明かにし、中國思想史研究に新たな觀點を提供した。